

雪

美知代

「また雪だと思ひ乍ら、喧しい雀、勵まされて飛び起るなり、障子を一枚閉じ、こゝろくまい事か雪も大層な大雪、恐らく其頃まれば大雪であつたらう、大抵な雪では埋らぬ南天の赤い實さへ一つも見事は出来なかつた。」

私はもう無性に喜んで、親友の得三君を誘つて兎狩りに出掛けやうと申込んだ、得三君と云ふのは新屋と云ふ大盡の若旦那で、大の獵好きである。と忽ち賛成して、渠の持山で折節大勢の袖が小舎がけして居るから奴等に手傳はせて追はふぢや無いかと云ふので、新調の銃獵服に、フランス銃を肩にかけて、大きな獲物袋は反對の肩に、甲斐／＼しい打粉して我等は出發た。ジョンは口笛につれて勇ましく駆け出したが、四邊は一面の銀世界！

鎮守、森、街道、田圃とあらゆるものは皆な純白な被衣を着けて、何時も汚い共同の塵捨場までが、ゆるい傾斜を造つて美しく見えるではないか、田の中には取り捨てられた桑山子一つ、其上に黒い鳥がとまつた儘、立つて居るのも見へる、と見ると上の方は傾いた屋根も、朽ちかゝつた廂も、貧乏人の徳平の家も、財産家の新屋の家も、皆一様に見えて、それが朝日に照り合ふと、恰度白銀に黄金の影を落したやう、森から田、田から池、池から山、山から空と輝き返して其はもう眼が眩しくて、到底正面に仰がれたものでは

ない、歩いて居れば流石の先きは冷いが、案外寒さを感じぬので、笑ひ乍ら興じながら兎角する程に、我等は早や志す山の麓に着いた、と俄に氣絶しい人の叫聲、メリメリドサンと大木の倒れる音響につれて四邊はざわめき立つた。何事かと考へる程も無く年若い袖一人、眞蒼な顔色をして林に衝突り乍ら、あたふた我等の方へ駆けつけるので。

「如何したんだお前そんなに駆け出して何處へ行く？得三君が尋ねると袖はひたと立停つて、

「やあ若旦那か、俺あつ魂消たゞ……したがまあ好い處でお目んのかゝりやしたのう」如何かしたのかい「如何の斯うの云ふてから、若旦那がいに話あ無いわ、親方が壓碎けてのう」

「壓碎る？」

「され／＼、好い入ぢやつたに……如何した事だか木へい倒かゝりました」

「それや又如何したんだ」
「如何した事だか、そんげな事べい俺知りませぬだ、いつもの様に皆で木のう挽いとりますと、親方さあ傍へ来てまぢり／＼とらばれたが、メリメリメリちて、大い松が倒かゝる、やれ云ふ間にかあ親方さあ壓碎げられた、空虚だつたのが雪さあ重かつたぢやろかい、まこと氣疎げな事で」
「それで壓潰されたんだね」

私の郷里は東都からずつと西の方は兵庫縣、と云つても神戸や舞子の近邊では無く播州の北の果に當る處で、恰度播丹播の三ヶ國が脊合せをして居る山脉續の眞中だから、冬に入つての寒さは中々東北にも劣ら無い、籬に菊の花を見る前から霜が降りて、栗の葉をバラバラ落ちるかと思へば手水鉢に氷が張つて割れるやう、跳釣瓶の竹竿に懸氷が垂るやら、大根を抜いて田の邊の池で洗つた晩は既う白いものがちら／＼して、寒狐が叫び乍ら崖を飛廻ると三毛猫は尻尾を巻いて圍爐裡の傍に丸う躰ると云ふ始末、野良の仕事も段々閑になつた若し衆達が煩冠りに懐手ぶらりとさして、据風呂の煙が湯氣に混交て溢れ出る家内には若々しい笑聲やら鄙歌やら、赤い襟に豊かな腕を深う見せ乍ら流し元で仕終をする村の娘の顔を、格子窓の障子に甜穴造りへて想はす恍惚するのも此頃である。

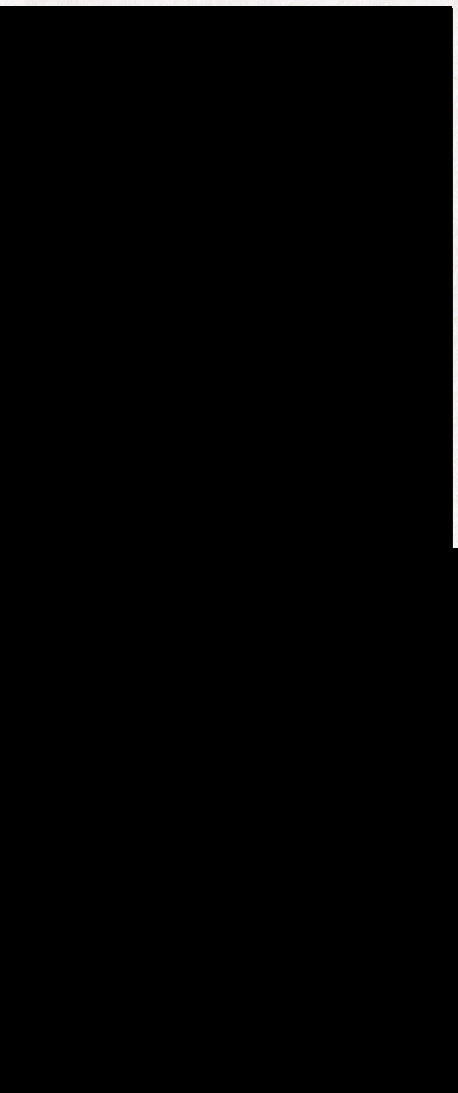
て私は今東京に居ても遺塵に雪の降つた朝は、取りわけ平和な故郷の景色を思出して、夫から夫へと聯想するのであるが、實は今お話し仕やうとするのも、其聯想の一つに外ならぬそれは矢張りしう寒い朝の事てふと眼を覺ますと部屋障子の障子が馬鹿に明るいので、は

「左様でがんす若旦那『死んだのか』」

「いんにや、ふつ／＼り／＼息のうしとりますぢやが、まさかおつ死んだが增てがんす、可愛さうにのう、兩腕兩足おつ壓碎れて、俺はあ醫者殿迎に町さ行くだ」
「左様かそれぢや」

と得三君は大意で行く様に命じて、同時に上へと急いで登るのであつた。て私も其後に續いたが、憐れなる親方は眞白な雪の上に倒れて袖共は周圍を取巻いて居る、二人は其傍に進み寄つた、親方は絶えず大きな眼を開いたまゝ、早くも紫に變つた唇を盛しくかみしめて、驚ろいた様に四邊を見廻して居たが、頬の邊りは恐ろしく痙攣して頭髮は倒立ち、鼓動は不規則で今にも死んで行くかのやう。我々は更に近う寄り寄つて、ずつと前に身を曲めた。すると渠は得三君を認めたらしく。「どうぞ若旦那」と危く云つて「どうぞお俯侶さんと呼んで、早う……來て貰ふて……今日と云ふ今と云ふ今日私は、私にや罰が當つたんで、これ此兩腕兩足……若旦那免して呉れさつしやれ、私が悪かつたでがんす、私は、あゝ濟みましれえ……」今醫者を迎へに行つてから、お前大丈夫助かるよ、氣を確に持たなきやいけなさい「いや私は最早死にますぢや……」したがのう若旦那、私は濟ん事しとりますぢや、誰も知るまい、此胸が……此胸かせつない、けんどもが免さつしやれ、それから金子ぢやが、私の今日迄の賃錢は繰にやつて……

「親方氣を確然持つて呉れんさい。袖共は鼻つまらせて末後の水をすゝめた。渠は俄に激しく頭を振つて、脈は非常に高まつて如何にも苦し氣に、而して終にのけぞつた。
「まさか斯うして見殺す譯にも行かないぢやないか、



オイ誰か一枚筵を持つて來て、お醫者迄運ばうぢやないか」と得三君は叫んだ。て若い者が二人小舎をさして走つた。とまた親方は正氣付いて、
「私は馬あ買ふたが……昨日前金のう打つたばかりぢやて……馬あはあ私のがぢやけに……茂作から受取つて呉れ……さつしやれ……」
袖共は筵の上に移さうとしたが、渠は宛ら鳥の羽はたく様に身悶へて、やがて固くなつた。
「やれはあ、到頭死たゞ」口々に云つて一同涙ぐむので我等は黙つて暫時佇つたが其儘歸宅した。が私は終日此親方の死について彼れは思ひ廻らして、一種云ひ知らぬ感慨に堪へぬので。
あゝ人生とは眞に不可思議なものである、渠は久しい以前から新屋に出入つて、正直者と名有ての男であつたが、人知れず犯した罪とは何ぞ、渠は神から興へられた罰であると懺悔したけれど、渠を知る人の誰とて其意味を知つたものはないのである (完)